

## 書 評

### 井口富夫著『西本願寺と門前町のにぎわい

#### ——京都のまちづくりと伝統産業の振興——』

永田文昌堂 2013年 313p. 3200円(税別)

門前町と言えば、(集落)地理学の古典的テーマのように思える。しかし、近年は、研究数が減少していることも、かつて評者が指摘したとおりである(小田 2002)。そのような中で、本書は経済学者の著書ではあるが、地理学的な門前町の現状調査にページがさかれており、地理学研究者の関心をひくものである。以下、本書の紹介を行い、あわせて評者のコメントを述べたい。なお、本書には初出論文が明記されていないため、判明する範囲で各章の初出論文を付記し、本書利用者への一助としたい。

第1章「地域住民を主体にした西本願寺門前町の新たなまちづくり」は、本書の前書き的部分である。最初に、本書の目的が、京都の西本願寺門前町と仏壇仏具産業を研究対象にして、「京都のまちづくりと伝統産業の振興」について検討すること、「京都の発展に資する基礎資料」を提供すること、「具体的な提言」を行うことだとされる。西本願寺門前町を知らない者には、門前町とともに仏壇仏具産業が研究対象になっていることに違和感があるが、これは西本願寺門前町のユニークな特色である。「基礎資料」の提供とは、本書の調査報告書の側面を指していると思われる。「具体的な提言」とは、特に西本願寺門前町のまちづくりへの提案であり、最後の第11章がそれに相当する。第1章は次いで、京都市における人口重心の南下に触れる。木に竹を接いだような文章の流れは、井口(2009a)の「町が移動する」の節だけを

ここに挿入したためである。その次に、また不自然に、まちづくりの基本的な考え方や具体的な施策案が挙げられる。これは第11章のダイジェストである。分析方法については、経済学の産業組織論の手法を用いるとし、西本願寺と門前町との関係を、宗教サービス産業と仏壇仏具産業との関係ととらえて明らかにするという。仏壇仏具産業を絡めるのは、上述のように、西本願寺門前町に独特な分析視点ではあるが、本書の以下の記述では、この視点は第11章を除いてほとんど出てこず、あまり意味がない。なお、本章の冒頭から「京都GARE門前町」という意味不明の見出しが登場するが、用語の説明があってしかるべきであろう。

第1部「京都のにぎわいと門前町」は、第2～4章の3つの章からなる。京都市内の他の繁華街や門前町との比較が中心である。

第2章「京都の繁華街としての四条界限と京都駅周辺」は、京都駅周辺と四条通・河原町通一帯の二つの繁華街を比較したものである。具体的な対象地区は、京都駅周辺は、南北：五条通～JR東海道本線、東西：大宮通～河原町通という京都駅北側の範囲で、東西両本願寺門前町とほぼ一致するという。一方、四条通・河原町通一帯は、南北：御池通～四条通、東西：烏丸通～鴨川の範囲である。京都駅周辺を12地区、四条通・河原町通一帯を4地区に区分し、計16地区について、①今後の発展可能性に関する調査者(著者の授業の受講生)の印象と、

②住宅数や業種別の商店数を調査している。受講生が重複して調べており、67件のデータが集まっている。結果は、①については、四条通・河原町通一帯の発展可能性が高く、次いで京都駅近くの地区という。②については、京都駅周辺は、住宅の比率ははるかに高く、逆に商業施設や飲食店等の比率が低いという。著者はこれを、「密度の経済性」が低いと称し、回遊性に欠けると述べている。「密度の経済性」とは、「一定地域に多数の店舗が集中することによって生じる集客効果」と説明されている（第1章の注にも説明がある）。本章では、16地区について41変数を用いて因子分析（主成分分析）も行い、「中心繁華街」「観光地」「自動車」「金融街」の4個の共通因子を見出している。そして、16地区との関係を検討し、「中心繁華街」「観光地」因子は四条通・河原町通一帯の因子得点が高いという結果が出ている。本章の問題点をいくつか挙げれば、①について、調査者の見聞の印象をもって各地区の発展可能性とするのはいかがであろうか。また、本章に限らないが、調査を複数の受講生が行っているため、地区ごとの調査件数が1~7件とかなりのばらつきがあることも好ましくない。さらに、②について、受講生の間で調査結果が異なる場合、件数の多いほうを採用しているのもどうであろうか。本章の初出は井口（2005a）であり、地区別商店数などの単純集計結果が付け加えられている。

第3章「門前町インデックスによる門前町の総合比較」は、京都市内の多くの門前町を総合的に比較し、西本願寺門前町の特徴を明らかにしようとしたものである。調査対象は、2001年4月~2012年4月に京都新聞に連載された「門前町物語」の46神社仏閣のうち京都市内にある34である。案内所の有無など12項目の評価基準を設け、地元指向に0、来訪者指向に1のポイントをつけていき、寺社ごとにポイント

を合計する（著者は、この合計値を「門前町インデックス」と称する）。複数の受講生が調査し、124件のデータが集まっている。その結果、門前町インデックスが最も高い（つまり来訪者指向が最も強い）寺社は、壬生寺と北野天満宮だという。また、東本願寺と西本願寺は全体の平均に近く、地元指向と来訪者指向のバランスを保っているという。複数の門前町の属性を数値化して総合比較しようという本章の試みは非常に興味深いだが、問題点のひとつは、12項目の評価基準の多くが、拝観料や神社仏閣内部施設など寺社に関するもので、門前町そのものの属性については、「周辺の施設」の有無や「単なる住宅」の有無など、項目数が限られていることである。これでは、「門前町インデックス」でなく、「寺社インデックス」の面が強い。また、同じ寺社を複数の受講生が調査し、寺社によって2~7件と調査件数のばらつきがあることは第2章と同じであるが、調査対象とする門前町部分の空間的範囲をどこまでにするかという基準が設定されていないのも、結果に大きく影響するため問題であろう。本章の初出は井口（2005b）のようである（初出文献は評者未見）。

第4章「京都の観光と宗教」は、節ごとに内容が異なり、多岐にわたるが、京都市内の他の寺院や門前町の話が中心である。I節は、中原（2002）の龍谷大学学生へのアンケート調査により、回答者の約8割が京都から観光や歴史を連想するという結果を紹介している。II節は、京都府内のいわゆる「本山」寺院と前述の京都新聞「門前町物語」掲載の約35の「末寺」寺院を対象にして、各寺院所持の文化財数との関係を調べ、「本山」は「末寺」に比べて文化財の所持数が多いと述べている。予想できる常識的な結果だが、「末寺」の対象設定には問題がある。本節は細川（2005）に基づいている。III節は、伏見稲荷大社鳥居前町である稲栄会商店

街（現・伏見稲荷参道商店街）の調査報告である。28の事業者を対象に、店舗や来店者などについてアンケート調査を行い、特定の時期（正月）への来客の集中などを指摘している。本節の初出は井口（2004）である。IV節は、京都市東山区にある高台寺への来訪者に対して行ったアンケート調査の報告である。観光（紅葉を含む）目的が多いことなどを指摘するが、11月に調査したのであるから当然の結果であろう。また、他の寺院でのアンケート調査結果を合わせ見て、西本願寺・清水寺・東福寺に比べて、高台寺は初めての来訪者の割合が高い（リピーターの割合が低い）と述べている。本節は谷・澤井（2006）に基づいている。

第Ⅱ部「西本願寺門前町の生業と伝統産業」は、第5～8章の4つの章からなる。西本願寺門前町の仏壇仏具業や旅館・ホテル業などの産業が主なテーマである。

第5章「西本願寺門前町とは」は、西本願寺門前町の概論を意図したものと思われるが、構成が分かりにくく、その試みが成功しているとは思われない。まず、西本願寺門前町の範囲について広狭2つを考える。狭いほうは、東西：堀川通～東本願寺、南北：六条通～七条通で、「植柳」国勢統計区にほぼ対応するという。広いほうは、東西：JR山陰本線～鴨川、南北：五条通～JR東海道本線とする。次に、西本願寺門前町の特徴として、非日常性、密度の経済性（狭い地域に密集）、ゲートウェイ（京都駅）に隣接、豊富な人的資源の4つを挙げる。また、西本願寺来訪者の属性や買い物行動、門前町活性化案などについてのアンケート調査結果（日本語371部、外国語50部回答）を紹介し、津田・前田・細川（2005）に基づいて、清水寺と比較する。そして、西本願寺門前町衰退のいくつかの要因を述べ、現在の主な事業者を紹介している。本章の初出は井口（2009b）であるが、構成順序を入れ替え、文章もかなり加筆し

ている。また、井口（2009b）にはないアンケート調査の単純集計結果や調査票も収められている。2001年に行われたこの来訪者アンケート調査の結果の初出は、龍谷大学社会科学研究所西本願寺門前町まちづくり研究会（2005）のようであるが、本書には明記されていない。

第6章「京都ブランドと西本願寺門前町」は、京都ブランドが主テーマで、西本願寺門前町の事業者の話も少し出てくるが、門前町自体とはあまり関係のない章である。まず京都（京都市）の特性を、「密度の経済性」「歴史」「宗教・家元」「修学旅行」という4つのキーワードから説明する。次に、京都商工会議所による京都ブランド推進の動きや、京都市・京都府による伝統工芸品発展への施策について述べる。製品の差別化と「見せびらかし」消費を需要曲線で理論的に説明し、京都ブランド商品と一般商品の価格を、京扇子と京仏壇を例にとって比較する。最後に、京都ブランドや京都の今後について、交通網の変化や国際競争力、富裕層の呼び込み、新製品の開発などの面から述べる。本章は総花的な話題の羅列で、著者の主張がよく理解できない。初出は井口（2009a）である。

第7章「西本願寺門前町と仏壇仏具業」は、東西両本願寺門前町の仏壇仏具事業者へのアンケート調査報告である。最初に、日本標準産業分類における仏壇仏具製造業と仏壇仏具販売業の扱いと仏壇の製造工程について説明する。次に、アンケートについて、調査対象が、京都府仏具協同組合の組合員事業者のうち、東西両本願寺門前町に立地する事業者であると述べられる。回答は60事業者から得られたという。本書には記載がなく遺憾だが、初出論文の井口・李（2004）によれば、調査対象は74事業者（38は仏壇・仏具商、36は製造業者として登録）で、回収率は81%である。また、受講生を10グループに分けて調査させたようである。主な

結果が羅列されるが、販売業者においては、寺院やその他の紹介が最多というところが7割で、店頭販売が最多という業者は3割にすぎないことが目をひく。また、著者は注目していないが、西本願寺門前町で事業を行うメリットがないという回答が、製造業者だけでなく販売業者でも約3分の1あるという結果は、この地区の門前町らしからぬ現状を感じさせる（これは、第8章の旅館・ホテル業者でも同様である）。本章は、初出の井口・李（2004）から、かなり加筆されている。

第8章「門前町と旅館・ホテル業の衰退と発展」は、東西両本願寺門前町の旅館・ホテル事業者へのアンケート調査とその回帰分析の結果報告である。おそらく地理学の門前町研究に最も近い内容であろう。章の最初に東西両本願寺門前町の説明があるが、本書の他の箇所（特に第5章）と重複している。アンケート調査の対象は、京都府旅館組合加盟の旅館・ホテルとNTTタウンページ掲載の旅館・ホテルである。南北：五条通～JR東海道本線、東西：JR山陰本線～鴨川に位置する109件に、授業の受講生が調査票を持参して回答してもらっている。回収件数は53件（回収率49%）という。旅館・ホテル事業者の多くが小規模、個人経営、比較的安価な旅館などの結果が提示されている。次に、客室利用率と宿泊客数の推移を被説明変数、営業形態（ホテルか旅館か）や価格、駐車場の有無などを説明変数とする回帰分析を行い、その結果から、宿泊客を増やし、客室利用率を上げるには、ホテル形態にすること、旅行社と提携することをすすめている。本章の後半は、2009年の新型インフルエンザが旅館・ホテル業に与えた影響を、やはり事業者へのアンケートにより調査したものである。調査対象・方法は前半とはほぼ同じだが、少し広い下京区全体を範囲とし、NTTタウンページのかわりにMSN電話帳を利用している。資料上

の対象件数は135件、廃業を除く調査票配布数は130件、有効回答数は65件（回収率50%）という。大部分の事業者が深刻な影響を被ったなどの結果が報告されている。本章の前半は井口・李（2005）と井口（2007）、後半は井口（2010）が初出であるが、前半部分の調査票や集計結果表の数値は、初出の井口・李（2005）から入れ替わっている。実は井口・李（2005）には、調査票と集計結果の項目が合わないという初歩的な欠陥があるのだが、本書では両者を合致させて、不都合が修正されているように見える。しかし、集計結果表から判断すると、調査件数は46件のようであり、53件という本文での記述と整合しない。調査件数以外にも旅館の割合など、データと本文が合わない箇所がある。これは、データを入れ替える一夫で、本文を初出時のまま修正していないためである。本書の価値のひとつは調査データの提示にあると評者は考えるが、このようないい加減さは問題である。

第Ⅲ部「西本願寺の750回記念事業と門前町のまちづくり」は、第9～11章の3つの章からなる。2011年に催された西本願寺の親鸞聖人750回大遠忌法要に関連した事業やそれへの対応について述べ、最後に西本願寺門前町のまちづくりについて、著者の考えを記している。

第9章「西本願寺の文化財公開と門前町のまちづくり」は、2007～2010年に全国6カ所の博物館・美術館で順次開かれた「本願寺展」来館者へのアンケート調査報告が主である。まず、門前町等に関する先行研究の紹介と、親鸞聖人750回大遠忌法要記念事業「本願寺展」の概要説明がある。次に、アンケート調査について、全国6会場の来館者2894名から有効回答を得たと述べられる。結果については、来館者は高齢者、女性が多いことなどが記されるが、門前町に関しては龍谷ミュージアムや伝統産業体験ツアーへの関心を尋ねる項目がある。ただし、

これらへの関心が高いという結果が出ているのは、調査対象が本願寺展来館者である以上、当然であろう。著者は、この結果から、西本願寺の非公開文化財公開や門前町の伝統産業体験ツアーとタイアップした龍谷ミュージアム運営が西本願寺門前町のまちづくりに重要であると述べるが、この調査は根拠としては弱い。最後に、博物館学における博物館の議論が紹介されるが、半分以上が引用で、あらずもがなの内容である。本章の初出は井口・李（2011）である。

第10章「西本願寺の750回記念事業と門前町の事業者」は、親鸞聖人750回大遠忌法要に際して、特に地元の事業者がどのように対応したかを扱ったものである。まず、西本願寺が、親鸞聖人750回忌記念事業のひとつとして、門前町を「ご縁まち」と名付け、「ご縁まちマルシェ」（旧植柳小学校運動場での土産品などの販売）など各種の行事を開催したことが述べられる。次に、著者が中心となって立ち上げた龍谷大学門前町サークルの調査報告書やまちづくり活動が紹介される。そして、地元事業者や住民有志によって2009年に結成された「植柳まちづくりプロジェクト・チーム」の活動が詳述される。具体的な活動内容は、ガイドマップ（冊子体）の作成・配布、写真入りカレンダーの作成・販売、「しんらんさんグルメ」の開発・販売、マスコット・キャラクター「おりんちゃん」の制作とグッズの販売、毎月16日の「いちろく市」の開催などである。一方、親鸞聖人750回大遠忌法要への事業者の対応を把握するため、大遠忌法要が終了した後の2012年5～6月に、西本願寺門前町（国勢調査の「植柳統計区」=下京区第3国勢統計区）の民営事業者約300を訪問して、アンケート調査を行ったようである。有効回答数は、旅館・ホテル事業者7件、一般事業者57件で、回収率はかなり低い。結果が羅列されるが、「何もしなかった」「分か

らない」という回答が多く、現状で大きな問題がないと考える事業者が多くいると著者は解釈している。最後に、過去の遠忌法要時の様子について、西本願寺門前町の事業者6名に聞き取り調査をした内容が箇条書きでまとめられている。断片的であり、また直接まちづくりと結びつくわけではないが、現場の人の思い出話は非常に興味深い。

第11章「西本願寺門前町の課題とまちづくり試案」は、西本願寺門前町のまちづくりに関する著者の提案である。最初に、まちづくりを考える際のキーポイントとして、心の活性化など5点を挙げる。次に、具体的な施策の例として、タウンウォッチング、「香り」や「三十六歌仙」のテーマ設定、門前町ブランドの確立、ランドマークの設置、西本願寺・龍谷大学・行政のコーディネートなどについて述べる。そして、日本有数の仏壇仏具産地であり、京都駅から至近距離にあるという特徴も備えた西本願寺門前町は、西本願寺との相互依存関係を強化すべき面と、独立すべき面とがあると主張する。また、仏壇仏具事業者は、西本願寺や関係寺院、檀家を相手にした訪問・通信販売が主で、門前町来訪者に依存しないビジネス・スタイルになっているため、まちづくりに関心が薄いことを問題視し、地元事業者の関心を高めることが重要であるとする。最後に、2011年にオープンした龍谷ミュージアムが、まちづくりの拠点として期待されると述べる。本章の一部は、井口（2009b）や井口・李（2011）が利用されている。

本書最後の「あとがき」は、本書の出版経緯に加えて、西本願寺門前町は貴重な資源が豊富に存在するのに、地元の事業者・住民、特にキー・パーソンである仏壇仏具事業者にまちづくりへの関心が低いことを、あらためて指摘している。「あとがき」の一部は、井口（2009b）の再利用である。

以上、コメントをはさみながら、本書の内容を章ごとに紹介してきた。本書全体としては調査報告が中心で、観察調査（第2, 3章）やアンケート調査（第4, 5, 7, 8, 9, 10章）、聞き取り調査（第10章）、計量分析（第2, 3, 8章）をまとめ、まちづくりのアイデアを付け加えた（第11章）という内容である。まちづくりの議論の当否は、素人の評者には判断できないが、先行研究の綿密な検討や、得られた調査データに基づく深い考察はなく、はっきり言って、研究書としてはずいぶん物足りない。

しかしながら、本書にはデータの単純集計表や調査票が掲げられており、調査報告としてはそれなりの意味はあろう。特に、井口（2005b）や龍谷大学社会科学研究所西本願寺門前町まちづくり研究会（2005）、龍谷大学経済学論集（学生論集）所収論文は閲覧が困難であり<sup>1)</sup>、そのデータが本書で見られるのはありがたい（とはいえ、本書自身も、京都の小出版社から発行されているためか、あまり流通していないようであり、CiNii Booksで見ても所蔵機関は少ない）。

ただし、調査方法や集計方法に疑問があることは上述したとおりである。著者が多用するアンケート調査について、問題点をもう一点指摘しておく、複数回答可の項目の集計で、回答数を単純合計して、その中で各選択肢の割合を計算しているが、回答者数を分母にして各選択肢の割合を計算すべきである<sup>2)</sup>。

また、経済学者には高望みなのであろうが、地理学研究者なら、もっと地図を使って議論をするであろう。たとえば、繁華街16地区の比較を行った第2章や、仏壇仏具業者を扱った第7章、旅館・ホテル業者を扱った第8章などは、地図を描いて何が分かるのかを考えるのが地理学の常套手段である。

空間的思考の弱さという面では、同じように門前町と称しても、調査・考察の対象範囲が、

章によって異なっていることも話を分かりにくくしている。第2章、第7章、第8章は、第5章で言うところの広いほうの門前町で、著者は「東西両本願寺門前町」と表現している。一方、第10章と第11章は、狭いほうの門前町、すなわち西本願寺門前町が対象である。著者は第11章で西本願寺門前町のまちづくりを論じるが、対象範囲の違う第2章、第7章、第8章の調査は、主張の根拠になりえない。

著者の関心が産業にあるためか、調査の対象が事業者に偏っていることも指摘できる。来訪者対象の調査は、第4章Ⅳ節と第5章、第9章のみで、そのうち西本願寺門前町来訪者が対象のものは第5章だけである（この調査は西本願寺阿弥陀堂門で実施しているので、正確には、門前町ではなく西本願寺来訪者が対象である）。門前町のまちづくりを云々するからには、門前町を訪れる（可能性のある）人のことを、もっと知るべきではなからうか。そして、まちづくりを云々するからには、事業者以外の住民の調査をまったく行っていないのも奇異なことである。また、地理学研究者なら当然思いつくことであろうが、門前町にどのような建物や空間があるのか、どういうコミュニティや社会組織があるのかにも関心は向けられるべきである。本書は、「西本願寺と門前町のにぎわい」というタイトルながら、読了しても、西本願寺門前町については分かった気にならないのであるが、その理由は、門前町そのものを扱ったと言える章が半分程度しかないことや、狭義の西本願寺門前町を扱った章がわずかしかないことに加えて、上述のように、調査対象が一部の事業者に偏っていることにも起因するのであろう。

最後に、本書が扱う西本願寺門前町は、日本の普通の門前町に比べれば特殊なのではないかという点に触れたい。通常の門前町は、寺社への参詣者を相手とする産業（商業、飲食業、宿

泊業など)を主な生業とする。寺社の規模が大きいと、それらの寺社に關係する宗教者や職員の住宅(宿坊や社家を含む)や寺社御用達の業者が近くに位置することもある。そして、これらの業種の建物が、集落の主要部分をなしていれば、形態的にも典型的な門前町と言える。西本願寺門前町の場合、まず、京都という大きな市街地の一部に埋もれた「門前街区」である点において、形態的な弁別性が弱い(著者の言う広義の門前町、すなわち「東西両本願寺門前町」は、範域が広すぎて、通常は門前町と呼べるものではない)。産業については、狭義の西本願寺門前町のみの詳細な調査が少ないため、判断がむずかしいが、親鸞聖人750回大遠忌法要に際して、来客や売り上げが増えたという回答が4割以下しかないという第10章の調査結果を見ると、現在の生業は参詣者にあまり依存していないと考えられる。そして、この地区の主産業と言えそうな仏壇仏具業については、数軒の販売店ならばともかく、一般的には、製造業者が門前町に大規模に立地することは、それほど例がないであろう。一種の地場産業である仏壇仏具業が門前町と結合している点において、西本願寺門前町は非常にユニークである。仏壇仏具業という特殊な要素を取り除けば、西本願寺門前町は、かつて参詣者でにぎわっていた時代に比べて、門前町的性格を大きく失ってきているのではなかろうか。著者は、本書の方法論や本書から得られる知見が、あらゆる都市の研究や政策に応用可能であると自負するが(3~4頁)、上述のような西本願寺門前町の特殊性と変容を認識し、そのうえに本書の議論の応用を検討すべきであろう。

以上、問題点の多い著書ではあるが、本書が評者に門前町について考える機会を与えてくれたことも事実である。近年、あまり進展のない地理学の門前町研究にも一石を投じる書であることを記し、拙評を終えたい。

## 注

- 1) 井口(2005b)や龍谷大学社会科学研究所西本願寺門前町まちづくり研究会(2005)は、国立情報学研究所のCiNii Booksや国立国会図書館のNDL-OPACに登録されておらず、「龍谷大学経済学論集(学生論集)」も、所蔵機関はわずかである。前二者は、国立国会図書館サーチや龍谷大学蔵書検索で、かろうじて所在を確認することができる。
- 2) 評者はアンケート調査の専門家ではないが、総務省統計局の子供向けサイト「なるほど統計学園」に、「複数回答を認める質問の場合、合計が100%を超えますが、このような場合も円グラフにははいけません」とあるのを示せば、批判の根拠として十分であろう。  
(<http://www.stat.go.jp/naruhodo/c1graph.htm>)

## 文献

- 井口富夫 2004. 伏見稲荷大社鳥居前町の調査結果概要. 社会科学研究年報34:13-18.
- 井口富夫 2005a. 密度の経済性からみた地域特性の比較:京都市のケース. 龍谷大学経済学論集44(4):25-40.
- 井口富夫 2005b. 門前町インデックスの計測による門前町の総合比較:京都の神社仏閣のケース. 学術コンソーシアム事務局編『学術コンソーシアム通信 特別編:共同研究プロジェクト中間報告集』43-48. 大学コンソーシアム京都.(未見)
- 井口富夫 2007. 門前町の町づくりと旅館・ホテル業. 河村能夫編『京都の門前町と地域自立』207-227. 晃洋書房.
- 井口富夫 2008. 西本願寺の文化財と門前町の発展:九州国立博物館「本願寺展」来場者を対象としたアンケート調査結果. 社会科学研

- 究年報 38 : 107-117.
- 井口富夫 2009a. 地域の特性を活かした経済活動と京都ブランド商品. 井口富夫編『都市のにぎわいと生活の安全』97-116. 日本評論社.
- 井口富夫 2009b. 西本願寺門前町のまちづくりとソーシャル・キャピタル. 井口富夫編『都市のにぎわいと生活の安全』117-135. 日本評論社.
- 井口富夫 2010. 新型インフルエンザが京都の宿泊業に与えた影響と対応策に関する調査. 社会科学研究年報40 : 116-132.
- 井口富夫・李 復屏 2004. 京仏壇・仏具業の経営実態調査結果の概要. 龍谷大学経済学論集 43(4) : 71-88.
- 井口富夫・李 復屏 2005. 東西両本願寺門前町の旅館・ホテル業の調査結果：資料：京都駅北側一帯に立地する旅館・ホテルを対象にした調査. 社会科学研究年報 35 : 116-139.
- 井口富夫・李 復屏 2011. 非公開文化財の公開と門前町のまちづくり：西本願寺・本願寺展の来館者を対象としたアンケート調査結果を中心にして. 社会科学研究年報 41 : 1-20.
- 小田匡保 2002. 戦後日本の宗教地理学：宗教地理学文献目録の分析を通じて. 駒澤地理 38 : 21-51.
- 谷 直樹・澤井 篤 2006. 寺院の経営方針と観光. 龍谷大学経済学論集（学生論集）48.（未見）
- 津田充春・前田亜見・細川大輔 2005. 京都観光における清水寺と西本願寺. 龍谷大学経済学論集（学生論集）47.（未見）
- 中原実衣子 2002. 地域経済の変化と商店街の現状・将来. 龍谷大学経済学論集（学生論集）44.（未見）
- 細川大輔 2005. 京都の寺院分析. 龍谷大学経済学論集（学生論集）47.（未見）
- 龍谷大学社会科学研究所西本願寺門前町まちづくり研究会 2005. 『京都GARE門前町ルネサンス構想：地域住民を主体にした新たなまちづくり：西本願寺門前町まちづくり研究会報告書』龍谷大学社会科学研究所西本願寺門前町まちづくり研究会.（未見）

（小田匡保：駒澤大学）